

「愛と革命」という言葉が光を放っていた時代があった。一九六〇年代後半から七〇年へ。いわゆる団塊の世代と呼ばれる人たち(私も含まれる)が、学生期を過ごした頃だ。

学内から起こった学費値上げ反対運動から始まり、当時、激しかったベトナム戦争反対運動へと、次第に昂ぶりを増していった一連の行動。その中で「愛と革命」なる言葉は、学生たちの間で、合言葉のように使われていた。

ロープシンの『蒼ざめた馬』(川崎淡訳、現在は岩波現代文庫を読んだのは、そんな渦中だった。ロシア語を専攻していた友人から、「ロシア文学を読まな

読書術の遅れ半歩

文庫

■『南の島に雪が降る』加東大介著 舞台や映画で活躍した往年の名優が自らの戦争体験をつづった回想録。召集されニューギニア戦線に赴いた著者は、慰問のための

劇団を立ち上げるよう命じられる。様々な特技を持つ者を集めた急ごしらえの劇団はやがて、南島で死と向き合つ兵士たちの心の支えとなつていく。命を慈しむ心、反戦の願いが切々と胸に迫る。(ちくま文庫・800円)

新書

■『経営重心』若林秀樹著 日本の電機メーカーはなぜ米アップルや韓国・サムスン電子に敗れたのか。その問いに対してはこれまで意思決定の遅さや、広すぎる事業領域などの要因が示されてきた。では、日本はどの程度「遅く」「広すぎた」のか。本書は長年の分析をもとに数値で定量化し、わかりやすく説明していく。国内外の証券会社で活躍した人気アナリスト

の新作。(経営者新書・800円)
■『おしゃべりなコンピュータ』山岸順一ほか著 人それぞれに固有の声色を再現する音声合成技術。最前線と将来像を漫画や映画、身の回りの例から解説した。病気で声を失った人が自分の声を取り戻すことや、話した言葉を自分の声のまま外国語として発する同時通訳が「当たり前」になる日も近いという。振り込め詐欺など犯罪への悪用防止策も指摘する。(丸善ライブラリー・760円)